

ウンターにお持ちください

2011年01月06日 11:43:39

入館証番号: 

Call Slip

&lt;請求票&gt; (控)

書名
資料名 : 内藤湖南全集
巻次 : 第5巻
著者名 : 内藤虎次郎 // 著
出版者 : 筑摩書房
出版年 : 1972
大きさ : 23cm
頁数 : 546p

所蔵館 : 中央  
 所蔵部署 : 1階資料お渡し・返却カウンター  
 配置場所 : 1/76B 中)B2書庫B  
 資料ID : 1125944671

請求記号
0818
N262
N1-5

本 293 ~ 304,  
 487,  
 525 ~ 532

此書のやうなものを書いて見ようかと思ひ立つたのは、昨年の夏秋の際であつたが、其頃朝鮮へ旅行したので、姑らく着手の機会もなかつた。十一月の初めに文會堂主人の懇るなる勸めによつて、いよいよ着手することゝはなつたが、疎懶なる余には、到底自ら筆を執るといふことが見込がないので、懇意なる朝日新聞記者高島政之助氏に速記を依頼した。高島氏は我邦に於ける有数の速記者で、亦余が講演は最も數々速記された経験があるからである。かくて十一月十一日に第一回を演述し、同廿五日に第二回を演述し、十二月二日に第三回を演述し、十二月九日に第四回を演述し、十二月三十日に第五回を演述し畢つたが、變化の急激な支那の時局は、此の講演の繼續して居る二箇月間にも、目まぐるしき程變轉し、講演が終りて、其の速記録を訂正し、之を印刷して居る間にも、尙更に變轉した。講演を始めた頃にはまだ、熊希齡氏の施政方針も發表せられなかつたが、其の發表されたのを見ると、其の項目の分け方が、自分が論ぜんとして居ると大差がないので、半途から其の項目に隨ふやうになり、隨つて發表以前に演べた分をも、それと矛盾しないやうに訂正した。又印刷中には、熊希齡氏の總理辭職となり、袁氏の退歩的方針は、益々露骨になつて来て、殆ど變法論の發生せざる以前の清代に後戻りしようかと思はれる程になつて、本論の最後に論じた如く、熊氏の施政方針なども眼中になくなくなつて居るやうである。それ故此書の印行する頃には、すべて議論が時局に後れるやうになつて居ることは免かれないてあらうが、しかし現在の支那に對する余の意見としては、此の目前の時局の變化の爲に、之を改める程の事もないと思ふから、やはりそのまゝ世に問ふこととした。但だこゝに逆しめ讀者にこ

然るに袁世凱などの考では、最近の一次的反動の潮流を、政治上變遷の大勢の發現と誤信して居る傾が歴々と見え、一日々々との國運を底なき暗黒の坑に投げ入れんとして居る。従來の五國借款は、尙ほ自國の財政權の獨立を考へて上の借金で、同じ借金でもソコに苦心といふものゝ味もあるのであるが、近日の油田及び淮河浚運に對する外資輸入などは、殆ど自己の存立を認めぬ借金である。實は此書に對して起るべく豫想する批評の第二項にもある如く、自分は全く支那人に代つて、支那の爲に考へて、此書を書いたのであるが、今日のやうな状態では、モハヤ支那の爲

て展開せんとは試みぬのである。

積極的施設の責任者にして居る者に深き省慮を促がしたいと思つたので、積極的施設を説くには不便な自分の地位を強命の局面が、いかなる程度で收拾し、さうして其の最も適當な政治上進歩の階級に落着くべき者であるかを概論し、する處から、先づ支那の國情が果していかなる程度まで世界政治上の進歩に順應し得べき者が、現在已に破裂した草いふことを考へるまで、外國文明の深い意義を知らぬ、是が徹底せぬ變法論の真相である。自分は多少此の消息を解へば、新式軍隊の増加と解釋し、富國といへば、商工業の發達とのみ思ひ、政治の改革といへば、憲法とか國會とか支那の識者の智識が外制の根源由來を明らぬ迄に至らぬ爲に、其の取舍の議論も徹底せぬのであらう。強兵とい切であるが、其他の積極的施設として、外制撲滅を主張した處は、徹底して居らぬ恨がある。蓋し外制撲滅に就ては、るものとは選を異にして居る。劉坤一、張之洞の變法會奏なども、其第一奏たる、支那の宿弊を論じた處は、最も痛も、近年では最も切實なる者であつて、近來の變法論者の如く、單に外國制度の撲滅を以て、無上の政策と考へて居治の復古等を夢想する如き缺點もあるけれども、其の改革の精神は今に至りて生氣がある。馮桂芬の校邠廬抗議など點に、痛切な意義があり、中には支那の尙古思想に糞染せらるゝことを免かれ難い處から、封建の事實上復古、貴族政治の復古等を夢想する如き缺點もあるけれども、其の改革の精神は今に至りて生氣がある。馮桂芬の校邠廬抗議など日知録とか、黃宗羲の明夷待訪録とかいふ者は、時勢の弱極して、通變すべき機會が到着しつゝあることを看取した

がなかつた點もあるのである。

従來支那の經世論を立てた識者の論する所に徴しても、我々に深甚の感動を與ふる者は、其の自ら認めた弊害を救濟する方法として、自ら案出した議論であつて、之には奪ふべからざる權威を感ずる。たとへば顧炎武の郡縣論とか、

たがなかつた點もあるのである。

るべき者で、此の情力の方籌を知ることが、目下最も大切な事と思ふので、一つは校邠に涉る細目の議論に及ぶ邊て居る國情、人爲による矯正の效力を超越して居る國情が、自然に落着くべき前途は、確かに積極的施設の基礎となる。しかし古來の自然な成行から、並びに内外の形勢から攷究した結果、支那の如く絶大な情力によつて潛運默移しには、それらの材料が殆ど全くないので、已むを得ず、状況から判斷される限りの空論に留まることゝなつたのである。其の結果、其の収入の増加した割合を調査すれば、支那の實際の租稅負擔力が推算されるのであるが、今自分の手許發展を調査すれば、其の國富の増進を測定することが出来る筈であり、又鈔關其他の財政機關が、外國人の管理に歸但し自分は此より以上、精確な調査を爲すべき方法が、目下なしといふのではない。過去三十四年間の支那貿易の政に存する人であるが、其施政方針に述べある財政計畫は、決して我々が考へ得られる以上の精確な者ではない。

て得ぬのみならず、直接支那の政務に當つて居る人でも、立て得るかどうかと疑ふので、熊氏の如き、其の長所は財情を熟知せれば、到底確實なる計畫を立てる譯には行かぬ。尤も此の如き實務上の研究は、單に外國人たる余が、立務とする財政などに就ても、何種の租稅を整理すれば、幾許の収入があるとかいふやうな事は、今少し支那政務の内全體にいへば積極的施設に關する意見を建てる程、余が現在の支那に關する研究が出来て居らぬのである。目下の急害を感ずべき國から見た議論の缺けて居ること、是である。

とわつて置きたいことが二つある。一は此書に述べた意見に、積極的施設に關する考が甚だ乏しいこと、二は此書は支那人に代つて支那の爲めに考へたので、外國の側から、例へば我が日本の如く、支那の事勢によつては、多くの利

に考へるといふ必要は、遠からず無くなるかも知れない。北清事變の際に、一時天津に都統衙門といふ者が出来て、列國の聯合政治を行つたことがある。第二の大なる都統政治が出現すべき時機は、あまり遠いとは思はれぬ。支那人は大なる民族である、此の民族は民族として統一されて居る。又列國の支那に於ける利權も随分錯綜して居る。故に支那が急速に分割さるべき者とは、自分も思はない。但し一種の都統政治は何時でも行はれ得るのである。又此の都統政治の方が、國民の獨立といふ體面さへ拋棄すれば、支那の人民に取て、最も幸福なるべき境界である。我等が本論に述べた國防の必要が、ここに絶対に消滅する。支那の官吏よりは、廉潔に且つ幹能ある外國の官吏によつて支配されるから、負擔の増さぬ割合に善政の恩澤を受ける。袁世凱を大總統にさへ仰ぐ國民が、都統政治に不満足を訴へるなどといふことは、有り得べき道理がない。それ故自分は日本などの如く、支那の事勢によつて利害を感すべき國から見て、支那がいかにか定まるがよいかなどといふ議論は、無益だと考へたのである。支那の人民に聊かなりとも政治上の徳義心があつて、自己の存立を念頭に置けば、此書の本論に論じた如き落着を見るべき者、さもなくば第二の都統政治が出現すべき者と、覺悟さへすれば、日本其他の外國が取るべきすべての手段は明白なのである。都統政治には、君主制、共和制の問題も、領土に關する問題も不必要であるから、此書の本論に於ける第三以下だけが、尙ほ攷究せらるべき者と爲つて残るのである。但し我が日本が此の如き時機が到着した際に、支那の人民を救済すべき準備があるか。これは政府當局者に問ふのみではない、我が國民に切實に問ひたいのである。

我々は今以て失敗したる革命黨の人々に同情を表する。革命黨の人々は、自から支那の國民性を了解せなかつたので、其の限りなき辛苦の効果を水泡に歸せしめてしまつたのである。支那の國民性は何物を犠牲にしても平和を求め、兵亂の際などには桀驁なる棍徒の横行をも見、良民の代表たる父老（この語の使用されたことも古いものであるが）は屏息して居るが、少し事態が穩かになると、父老の歡心を得ざれば、繼續した統治は出来ぬのである。革命黨は其

の新銳の意氣にまかせて、父老の歡心を得ることを顧慮しなかつた爲に、近い將來に於て事を起す地盤を失つて居ることは、大なる打撃である。其の最初奮起した動機は、誠に堂々たるものであるけれども、其の倏起倏滅した状態は、李自成、張獻忠の如き諸賊と異ならぬ結果になつてしまつた。此の父老收攬といふことは、其の法制の美惡を問はず、人格の正邪を論せず、支那に於ける成功の祕訣である。悪人でも惡法でも、此の祕訣を得れば、必らず成功する、況んや改革論とか、政治上の主義とかいふことの如き、成功の要素としては、父老收攬の前には、何の力もないのである。革命黨は此の祕訣の鍵を握ることを知らないで失敗した。目下袁世凱が知縣試験に舊讀書人のみを採用するなどは、頗る此の祕訣を心得て居るのである。しかし勿論此の祕訣も國家の滅亡を救ふ爲には何の役にも立たぬ。父老の歡心を得て成功した君主でも、大總統でも、外敵に對して國を滅ぼさぬといふことは、決して保證されぬ。父老なる者は外國に對する獨立心、愛國心などは、格別重大視して居る者ではない、郷里が安全に、宗族が繁榮して、其日其日を楽しく送ることが出来れば、何國人の統治の下でも、柔順に服従する。長髮賊の李忠王を官軍に密告した者は、郷人に打殺された。支那に於て生命あり、體統ある團體は、鄉黨宗族以上には出でぬ。此の最高團體の代表者は、即ち父老である。袁世凱は或は此の父老の上に成功した大總統として、支那の國民を都統政治に引繼ぐ大人物であるかも知れぬ。袁世凱の此の如き大人物たることを知れば、都統政治に處する日本の準備も、容易に了解せらるゝのである。但しその準備が日本にあるであらうか。

余が此書の著述は、平生支那の先識者の著書及び意見に負ふ所少からぬので、聊か記念として卷首に、顧亭林、黃黎洲、曾濂生、胡澗之、李少室、馮景廷六君及び余が親交ある熊秉三氏の筆蹟を寫真版として載せることとした。此外にも多少補論したいこともあるけれども、這回は先づ筆を擱く。

大正三年三月十二日

内藤虎次郎

## 目次

## 緒言

時局の急變	三〇四
問題解決の鍵	三〇六
一、君主制か共和制か	
支那の近世は何時に始まるか	三〇六
貴族政治の時代	三〇六
名族の全盛	三一〇
家族制度の眞義	三一三
武人の勃興と名族の衰滅	三一四
君主の地位の變化	三一六
臣僚の地位の變化	三一六
獨裁政治の完成	三一八
外戚、宰相、宦官の無力	三一八
政争の新意義	三二〇
継統の秘密主義	三二二

獨裁政治の弊害	三二
民力の増進	三四
吏胥の實權	三六
貴族政治は復舊し難し	三八
共和政治	三六
<b>二、領土問題</b>	
年少學生の卓識	三〇
五大民族の共和	三一
革命時代の外交論	三二
異種族間の感情問題	三二
漢と匈奴	三三
唐の異種族優柔	三三
金の國粹主義	三四
元の三大族統治主義	三五
清朝の支那文化本位	三七
革命の漢人本位	三八
異種族の解體	三九
統轄の實力	四一
漢唐元明の實例	四二
清朝の統一は財力に因る	四三
財力の疲弊と統一力の弛解	四四
蒙古、西藏	四五
滿洲の特別狀態	四六
漢民族の發展は別問題	四六
<b>三、内治問題の一</b>	
地方制度	
階級過多の制度	四五
小區畫制	五〇
漢唐の制	五一
宋元明の制	五二
變遷の大勢	五三
顧黃二氏の意見	五四
大區畫の利及其根柢	五五
增官論の誤	五七
官吏の收入	五九
胥吏の弊	五九

日本と比較……………頁〇  
 改革の效……………頁一  
 官吏の貴族生活……………頁三  
 袁の政府に革新の氣分なし……………頁五  
 明清易姓の效……………頁六  
 自治團體と官吏……………頁七  
 近代官制の由來……………頁九  
 畫一政治の無效……………頁〇  
 尾大の弊は自然の隨力……………頁一

四、内治問題の二

財政

日下最難の問題……………頁三  
 妥協政策の結果……………頁四  
 軍隊の二重設備……………頁五  
 無制限の借款……………頁六  
 統一の望ありや……………頁七  
 軍隊と地方との關係……………頁八  
 軍隊精神の將來……………頁九

聯邦制度……………頁〇  
 國防の不必要……………頁一  
 自治的行政及財政……………頁二  
 財政の協濟……………頁三  
 農民の負擔……………頁四  
 負擔輕減と行政組織……………頁五  
 交通の大利と天産の過量……………頁七  
 穀物輸出解放論……………頁八  
 幣制改革論……………頁〇

五、内治問題の三

政治上の德義及び國是

進歩せる政論……………頁二  
 踏襲せる政論……………頁四  
 退歩せんとする政論……………頁四  
 本籍廻避の件……………頁四  
 自治制施行の件……………頁六  
 司法獨立の件……………頁七  
 孔教論……………頁九

袁氏の新名辭解釋.....四〇一  
 支那の平民的萌芽.....四〇一  
 國是.....四〇三  
 機會主義の誘惑.....四〇五  
 革命黨も亦免れず.....四〇六  
 列國の監視.....四〇七  
 正義の概念.....四〇八

附 録

清國の立憲政治.....四一一  
 革命軍の將來.....四一二  
 支那時局の發展.....四一四  
 中華民國承認に就て.....四一五  
 支那の時局に就きて.....四一六  
 支那現勢論.....四一七  
 革命の第二争亂.....四一九

緒 言

支那の時局は、走馬燈の如く急轉變化して居る。之に對して意見を立てる人々は、動もすれば其の推斷の外づれ勝なるが爲に、いかに支那事情に通達した者でも、他の信用をも落し、自らも茫然たる事が多い有様である。是は支那の歴史が從來、其の變化のいつも遅緩なる例を示して居たのに、近頃の文明の利器の利用は、全く反對の結果を齎した上に、本來支那人が無節操で、日和見で、勢力に附和して、一定の主張に乏しい處からして、始終テラ／＼して、傍觀者から全く見當が付かない爲である。目下勢力の中心たる袁世凱其人にも、特に一貫した政策がない、有名な政論家の梁啟超などが、手の裏を反すやうに、其の深讎の下風に立つなどは、いかにしても日本人でも、外國人でも豫想し難かつたことであらう。尤も内閣總理熊希齡などは、其中で一貫したる政策がある人物と云つても可なる人であるが、其の一貫した政策を遂行し得るや否やは、實に目下の疑問であるのみならず、熊希齡の政策も、實は清朝の末年にあつて考へた者を、革命後の今日に於ても、其の儘にやつて見ようといふやうに見える。熊氏とは余も懇意の間柄であり、十年前には當時の支那の救済策としては、多少所見を上下したこともあつて、其識見をば認めて居つたのであるが、あの時は西太后も在世なり、頭が古くても張之洞なども一代の人望を擧いで居り、云はゞ壓力の中心があつたのであるから、此の壓力を利用して、平和的に諸問題を解決するといふ見込も立ち、隨て中央集權も可なり、藩屬統一も可なり、利權回收も或程度までは行はれ得る筈であつたのであるけれども、今日の如く一旦革命が突發して



目次

一、支那對外關係の危險	
破裂は日本より始まる.....	四九
二、支那の政治及社會組織	
その改革の可能性.....	四九
三、支那の革新と日本	
東洋文化中心の移動.....	五八
四、自發的革新の可能性	
軍事及政治.....	五七
經濟.....	五二
五、支那の國民性とその經濟的變化	
果して世界の脅威となるか?.....	五五
六、支那の文化問題	
新人の改革論の無價値.....	五三

たり、若しくは商賈に資本を卸したりして作つた富は、自分が引上げた後、煙の如くなるものであるけれども、近頃は其の失敗に経験して、多くは貯へた富を外國の銀行に預け、若しくは外國居留地にある仕事に資本を卸したりすることになつて居るので、督軍の爲めに吸取られたところの支那人の富は、全く其の土地に戻るべき機会もなくなつて、支那の疲弊を促すべき原因をなすつゝある。此等は實は現在では、支那に外國人が居留地を形作つて居るが爲めに生じた弊害であつて、之を防止すべき手段は發見されない。若し支那人にして眞に經濟的に覺醒するならば、かくの如き富を限りなく外に漏出する弊害を防止するに努むべきことが第一であつて、日貨排斥などによつて舊來の利益壟斷をして居た支那の商人階級に援助する様な結果になることは、大いに戒めねばならぬところのものである。

## 五、支那の國民性とその經濟的變化

### 果して世界の脅威となるか？

支那の經濟組織の變化は、その革新を促がし、更に其の統一を促がし、經濟上からして生じた日本支那の密接なる關係が、更に政治軍事の方面にも及び、日本人が支那の民衆を統率し訓練して、歐米諸強國に當るといふことになれば、それが即ち歐米人のこれ迄も厭ふ憂ひて居る世界の大なる脅威で、即ちまた黃色禍となるわけであるが、さういふ可能性が果してあるであらうか。曾國藩が用ゐた湘軍は曾國藩が「暮氣用ふべからず」といつてから後に、更に左宗棠に率ゐられて中央亞細亞の遠征に功業をあらはし、「暮氣どころではない」と王闓運がいつたことがある。郷團組織の兵隊でも、その發展のしかたによつては、それだけの仕事が出来た實例があるのである。支那民族を政治的軍事的に、全く外に向つて發展せないと速断するのは、決して確かな證據があつての事ではない。

各國民の文化を論ずるに就て、動もすれば國民性といふことをいつて、支那の國民性がドウコウといふ人もある。現に東西文化を論じた支那の若い學者等も、西洋の進取的な氣象に對して、支那人は安分的な氣象が特色であり、それが爲めに西洋では學問は科學の進歩を來たし、政治はデモクラシーに傾いたけれども、支那の思想は全く別の方に向つて玄學的に傾いたといつて居る。然し民族生活、民族の生命といふものは、矢張り個人の生命の如く大體年齢が

ある。民族が発生してから四千年たつて居るものも、或は二千年しかたゝぬものも、或は八九百年位した経たぬものも、同じく相並んで現代に生存して居る時に、現代に於て見らるゝ各々の差違の點を捉へて、これが各々國民の特別な性質、本來の性質、乃至は永久の性質と考へるのは危険な判断の仕方である。去年の竹と今年の竹を、根から一樣の長さに切つて、去年の竹は中の空洞が特徴があり、今年の竹には中の空洞がない特性があると判断するのと同様である。今日では日本と支那とが國民性を異にして居る様であつても、日本が支那だけの長い歴史を経た時には、支那の如くなるかも知れぬ。支那が昔開闢からして日本位の時代しか経過せなかつた時には、今日の日本に類似して居らぬものでもない。國民性の研究は、これらの點を嚴密に差引いて觀察せなければならぬ。それゆゑ近頃よくいふところの時代錯誤といふ言葉なども、時としては無意味に濫用されて居る傾きがある。今日の所謂時代思潮といふ様なものは、民族の年齢等を計算に入れずに、當時世界一般に行はれて居る思想は、どの國にでも同様な効果を及ぼすべきものと考へて居るのであつて、譬へていはゞ一時流行病が発生した時に、二十歳になるものも五十歳になるものも、皆其の流行病にかゝる可能性を持つて居るとは限らない、それに罹つたものは時代思潮に相應して居るので、それに罹らないものは時代錯誤であると考へると同じである。其の流行病は二十歳もしくは五十歳の人に各々如何なる効果を及ぼすべきもので、それについては如何なる手當をすべきかといふことは、考への中に置かれぬ、是が所謂時代錯誤論でありとすれば、其の權威や知るべしである。それから又時間的に時代錯誤がありとすれば、空間的に地方錯誤もあるべきである。沙漠に適當した生物が濕地に生えるとは限らない、生物だから何所でも同じ様に生えなければならぬとはいはれない。近頃の思想の問題若しくは國民性の問題といふものは、すべてかくの如き點を顧慮せぬ過ちを致して居る。

一時支那人は日本が近年立憲政體によつて國力を増進したから、支那でも立憲政體さへ行へば國力が増進するもの

と考へた事もある。それらも矢張り日本の國民としての年齢と、自國の國民としての年齢とを顧慮せなかつた考へで、立憲政體論が一轉して更に極端な共和政體となつたけれども、その爲めに更に國力の増進を來ささない。あつた日本人などは支那が共和政治となつたので、日本などは世界進歩に取り残された様に考へたものもあつた。それらは皆國民の年齢、即ち歴史を考へないから生ずる謬論である。

立ちかへつて支那の政治的年齡をよく考へて見ると、支那の政治的に發展すべき時期は前にもいふが如く、漢代に於てすでに経過して居つて、その以後六朝から唐までは、すでに政治が漢代の如き才能中心の時代を去つて、「族望」政治となつてしまつた。それが即ち政治の墮落で、唐末から五代の過渡期を経て、宋代以後はこれが更に君主專制時代とかはつてしまつた。尤も此の君主專制時代には中間階級たる「族望」が無くなつたが爲めに、君主と民衆との接近を來たして、政治が民衆の爲めに機會均等に與へられる状態とはなつたが、然し其の時は即ち機會均等なる民衆の中から一種の政客階級を生じて、之が政治を獨占すると同時に、其の機會をつかまへ得ることの出来ない多數の政客候補者は、その餘ある能力を何事かに用ゐて、失望せる生活を慰安する爲めに、大きな文化階級を形作り、主として學問藝術に向つて全力を傾けることになつたので、それ以後支那の政治は政客階級に委せ切つて、多數の支那民衆の中で文化階級なるものが出來て、それが即ち支那の國粹ともいふべき學問藝術を握ることになつた。それでも或る時代、例へば明代などの如きは、其の政客たる機會をつかまへ得るものが割合に少數であつて、その機會をつかまへたものは極めて安全に生活し得たが故に、その仕上けた政治は甚だしく腐敗したものではなかつた。清朝になつてからその機會は單に讀書人のみならず、富者の如き財によつて官爵を買ひ得る輩に迄開放された。文化階級の範圍は廣くなつたが、そのかほり政治は益々腐敗して、その腐敗が一種の免疫性を帶ぶる程度に迄はつて來た。之が支那の社會の現状であるから、支那の最も進歩した階級が、眞に政治上の興味によつて動かされる可能性はだんく薄らい

で来た。近代でも政治上に活動するものは、大方今迄文化の餘り波及せなかつた極く初心な人民に、初めて文化が及んだ土地から出た者が多い。即ち曾國藩時代の湖南人、今日の廣東人等がそれであつて、彼等は支那の文化階級としては最も幼稚な、最も低級な趣味を持って居る地方人である。

大體人類が造り出した仕事の中で、政治軍事などの仕事は、最も低級なものであるが、日本が今政治軍事に於て全盛を極めて居るのは、國民の年齢として尙ほ幼稚な時代にあるからである。支那の如く長い民族生活を送つて、長い文化を持つた國は、軍事政治等にはだん／＼興味を失つて、藝術に益々傾くのが當然の事である。支那の過去の歴史を見れば、或る時代からこのかたは、他の世界の國民の——印度の如き古い文明國は別として——まだ経過しなかつた、之れから経過せんとして居るところの状態を暗示するもので、日本とか歐米諸國などの如き、其の民族生活に於て、支那より自から進歩して居るなどと考へるのは、大なる間違の沙汰である。

尤も支那に機械工業が興らなかつたとか、近代文明の利器を持たなかつたといふ事は、それはある特別の事情から來て居るので、それによつて國民生活の年齢を決すべき材料となすべきものではない。

右の如き論理から來る所の結論は、日本によつて經濟組織の變化を刺激されても支那人は、それによつて根本から若返へつて、も一度政治中心の生活に入るといふ様な事はあるべからざるものだといふことを知り得ることになる。其の點に於て日本が支那の多數の人口を統率して、世界の脅威となるなどといふ心配を歐米人はする必要がないのである。

それでは經濟組織の變化によつて、經濟上に於ける勢力が、從來と違つて進取的になり、それによつて世界の脅威となることは無いかといふことも、一つの重大問題である。現に米國の如きは初め原料産出國であつたものが、近來は一變して立派な工業國となり、更に世界第一の資本國とまでなつた。支那もさういふ徑路をとつて、工業國資本國

になつたならば、それによつて又歐米の脅威にならぬものでもないといふ考へが生ずるのであるが、之も他の點から十分精密に觀察する必要がある。一つは支那の内部の事情、矢張り社會組織の歴史的性質に關すること、一つは外部に關する事情である。内部の方からいへば、支那の社會組織は前にも言ふ如く家族郷團が本位になつて居つて、その家族の相續といふことも、既に分頭相續にまで進んで居つて、一家の資本でも集中する組織になつて居らぬ、一つは郷團組織であるが爲めに、商賈その他の事に於て資本を集中することが最も必要であるにしても、合資合名會社の組織位迄は出来るけれども、株式組織の如き大資本を集中すべき組織は出来ない。元來株式組織の如きは矢張り政治が確だといふことを背景とするもので、最後の據りどころは國家權力の上にある。支那の經濟組織の如く、若し株式會社を作つて重役が横暴な事をして、之を制裁すべき政治法律の機關がない國に於ては、株式組織は成り立たない。であるから純粹の支那人だけで資本の集中をはかるといふことは、到底望みはない。勿論經濟組織の變化に於て、外國人と共同した株式會社の組織などは益々盛になつてくるかも知れぬが、然しさうなると支那の資本が世界に向つて開放されるのであつて、支那人が自國民の力によつて、資本の脅威を他の國民に加へるといふ危険は無くなるのである。現に支那人で日本等に来て資本家となつて居るものがあるけれども、それらは少しも日本に對する資本の脅威とも何ともならない、寧ろそれらの支那人は、他國の確かな政治の下に資本を保有することに満足して居るのである。此等は例へば米國とか日本とかの歴史とは全く違つて居るのであつて、米國の如く開國以來出稼人によつて發達し、家族といふものの味を知らない爲めに、個人的發展並に資本の集中には非常な便利を得たものと、支那の如く長い家族制度を維持して居るものとは比べものにはならない。日本でも大體經濟の發展は古來開墾の結果であつて、而かもその上に士族の相續法は家督制度であつたが爲めに、その農民、商人の階級も皆同様な相續法をとつて居つて、それが資本の集中を助けた。それが外國と交通を開くと同時に、資本主義の經濟に移つて行くのに最も便利であつた。尤

も日本でも徳川時代迄は株式會社等はなかつたのであるが、明治の維新で一時古來の政治上の弊害を一掃して、確かな政治が行はれる様になつたので、殊に政府の奨励の結果、株式會社といふ様なものが盛に起つて、資本主義を發達させる様になつた。此等はすべて反面に於て支那が資本主義によつて、世界を脅威すべき基礎の乏しき事を證據立つるものである。

それから今も日本の經濟の發展は古來開墾の結果だと言つたが、歐米諸國の經濟の發展も之れと同じ様に、大體に於て植民地の發見の結果だといつてもよろしい。植民地の發見は、最初は天産物の採獲から、更に農業によつて原料品の産出を促かし、それから更に進んで工業國、資本國となつて來たのであるが、兎も角歐羅巴の發展は植民地があつたが爲めに、經濟が内部に行き詰らずに外に向つて進取を企てることが出來たのである。此の日本でいへば開墾の繼續、世界的にいへば植民地發見の繼續は、國民性或は民族性に於ても、大なる影響を來たして居るので、支那の學者の言ふ如く、西洋の文化が進取的針路を採つて、それで科學とかデモクラシーとかが發達を來たしたのだといふ様なことも、重要な部分は植民地の發見によつて内部に行き詰らなかつた結果である。日本等も支那に比べて歴史が短かい爲めに、また徳川の末年迄に經濟的に行き詰るところには至らなかつた。それでも既に一方に於て田沼時代等からして大阪に於ける米相場が盛になつて來て、米穀の産出の奨励にもなると共に、一方に於ては金銀の産出の減額によつて、長崎貿易を制限するの必要を生じて、殊に支那貿易品に對して國產奨励をするの必要に迫られて來て居つた。幸にその際諸外國との貿易が開かれたので、僅かに國產奨励の端緒に就いて居た生絲などは、急な發展をする様になつたので、兎も角五十餘年間の貿易が經濟の行詰りを緩和したのである。かゝる事がすべて進取的に國民性の發達を促がして、今日の日本人も國內の人口過剰に苦めば、米國にでも、支那にでも出掛けて行つて、何處迄も進取的に活動することを繼續してゐる。

支那の長い歴史は此等と頗る異つて居つて、大體支那の地理は、最も肥沃な土地を内部に持つて居て、その周圍は海でない處は沙漠とか、さもなければ非常な險阻な地形の土地である。それで支那の人力で出来る經濟發展がその沃饒な内地と、非常な不生産な隣地との境目迄、或る時代迄には發達してしまふといふと、それから以上は進取的傾向となることが六ヶ敷い。尤も近代になつては、南洋其の他海外に迄年々多數の支那人が移出せられ、蒙古滿洲の地方でさへも皆支那人の植民地になりつゝあるけれども、兎も角沃饒な内部の天然物を早く利用し切つた状態になつて居るから、それ以上は自然に人口制限も行はれ、自然に民族生活が安分的傾向にならなければならぬ譯である。

これが支那の學者のいふが如く、現在から見た支那國民性が安分的傾向を持つて居つた主なる理由であるから、此の状態にして一變する見込がなければ、支那の經濟發達は對外的關係からいつても進取的になり得ないわけである。尤も歐羅巴人が科學の力によつて植民地に經濟的發展をする方法と、支那人が人力によつて植民地に發展する方法とは、時としては互に相妨げない場合もあつて、歐洲人の發展して居る土地に支那人が發展する餘地がないといふわけではない。其の間に支那人が歐羅巴風の訓練を受けて大いに進取的の傾向を持たぬとも限らないが、それは又支那が經濟組織の變化を受けてから後、更に一段の變化を経た時であつて、從來の歴史から生ずる所の結果では、支那人の經濟組織は矢張り其の政治組織と同じ様に、其の安分的傾向を變じて進取的になるといふことは急には來る見込がない。恐らくは或る時代迄は歐羅巴人の科學的發展の缺陷を補つて、支那人は其の間に又一種の特別な位置を占め得ることであらう。故に支那の經濟組織の變化が歐米の脅威となるといふ様なことは、左程に心配する様なことではないと思ふ。

其の上世界の進歩が何處迄行くか判らぬが、植民地の利用といふものも、永遠に無限に出來るといふものではない。世界的に經濟が行き詰ることになれば、之を緩和する方法としては、矢張り支那人が歴史的に得來つた所の安分的方

法より外ないので、支那の現在の政治なり、經濟なりの状態は、世界の將來の状態を暗示して居るものと見ることが出来る。此等は支那を精細に觀察するもの最も興味を感ずべき所のものである。

## 六、支那の文化問題

### 新人の改革論の無價値

前に支那の文化中心が時代によつて、だん／＼移動を來したといつたが、此の移動は單に地方に於て行はれるのみならず、階級に於ても行はれて居る。

六朝から唐頃まで、名族があらゆる文化を占有して居つた時代から以來、だん／＼變化して來て唐末五代の間に、古來の名族が大概滅亡すると共に、文化の中心が讀書人階級に移つたのである。勿論此の讀書人階級の大部分は仕宦者であるが、元朝に於て仕宦者の大部分を蒙古色目人などに占有される様になつてから、文化の中心が處士に移つた時代があるので、元末から明の中頃までは文學藝術は多く處士の間にあつたといはれて居る。然し明清二代共に矢張り仕宦者が文化階級として最大なるものであつたが、清朝になつて特別な現象は、商人階級の發達であつて、主としてそれは揚州地方を中心とした鹽商の一團である。之は矢張り前に言つた地方で未だ文化の澤を蒙らない處が、漸々に古い地方の文化を受けて、そして又新しい文化を生ずると同じ様に、從來文化の澤を蒙らなかつた階級が、漸々に前の文化階級から受けた所の文化を、更に新らしき文化と化成して生面を開きつゝやつて居る。漢代の如く才能のあるものを文化の中心とする時代には、政治的には民政に於て其の特色を發揮し、社會的には禮法に於て其の特色を